

ラディカルとは何か — ヴェブレンからミルズへ —

寺 岡 寛

目 次

問題提起と整理
ヴェブレンから
ミルズ社会学論
現代的意義とは

問題提起と整理

チャールズ・ライト・ミルズ (1916～62) には、その短い生涯において、「ラディカル」な社会学者という紹介がついて回った。それでは、研究者において、そもそも「ラディカル」とは何であるのか。それ以上に、この問い、そのものがラディカルである。

ここでは、ラディカルはラテン語原義にそって、日本語の語感として「根源 (根本) 的」としておく。ラディカルは、多くの場合、「急進的」と訳される。それは根源的なものが、現実や現状と大きく隔たる場合、ラディカルな問いは急進的な考え方や行動を引き寄せるからであろう。ラディカル＝根源的とは何か。この問い、そのものが根源的である、ということになる。一体全体、我々の「研究」や「調査」において、研究者などは何を「根源的」に明らかにしようというのか。

たしかに、ミルズは社会事象の分析の際に、つねに表面的な事象ではなく、その「根っこに」あるより根源的な動因—社会構造—を探り当てようとした文字通り「根源的

(ラディカル)」社会学者であり、分析や解消だけではなく、それ以上に社会変革を追い求めた行動する政治思想家でもあった。ゆえに、ラディカルな論争を好んだ一同僚や研究者仲間からは煙たがられた。ミルズについて回ったもう一つの修辭は「ユートピアン」であった。この原義は英国人トーマス・モア (1478～1535) のラテン語著作『ユートピア』(1516年)にある彼自身の造語といわれる。これはギリシア語の「どこにもない場所」であり、転じて「理想郷」となった。ユートピアンは「理想郷」を追い求める人＝理想主義者となった。

ラディカルでユートピアンのミルズは、彼が理想としたより自由で民主的な「社会」を実現するための思想と、その思想を実現させる「政治」改革を一貫して求め、つねに「何を問題視すべきなのか」という論争をし、「誰が何を变えるべきなのか」に取り組み、語りかけた研究者でもあった。そのようにして、ミルズは根源的な社会学を追い求めたといつてよい。彼をそのような方向へと導いた一人は、ラディカルな研究者であったソースティン・ヴェブレン (1857～1929) であった。世代的に直接の邂逅はなかった。だが、大学生時代に、ヴェブレンの著作との出会いが、彼を経済学ではなく、社会学へと押し出した。

ミルズとヴェブレンはともに、20世紀以降の経済を「機械化」による大量生産社会と

大衆消費社会の到来を予想し、「官僚的」な組織—政府、企業そして軍部—が社会に大きく入り込むような時代の変化を預言者的にとらえ、警鐘を鳴らした。とりわけ、ミルズはそのような体制下での人びとの精神（心理）の在処と、社会変革の担い手を探ろうとした。他方で、社会変革に果たすべき「制度」としての高等教育のあり方を重視した点で、二人の社会をとらえる感性には共通したものがあつた。

二人の年齢差は半世紀以上である。世界的大恐慌の直前、カリフォルニアでヴェブレンは世を去った。研究環境では、決して恵まれた学究生活ではなかったが、ヴェブレンは、米国の経済構造の変わり目を鋭くとらえ、その将来の展望を予想する預言書のような著作を十数冊残した。世にもっとも知られたのは『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究—』（1899年）であり、ミルズはカール・マルクスやマックス・ヴェーバーと並んで、ヴェブレンの著作から多くの社会分析概念を紡ぎだしたことを自ら述べている。

毎日2000語以上の原稿執筆を課したといわれるミルズは45歳半ばで亡くなったものの、著書、論文、評論、研究ノート、講演記録など未発表分を含め一は膨大である。一般によく知られているのは、『新しい権力者—アメリカの労働組合指導者—』（1948年）、『ホワイト・カラー中流階級の生活探求—』（1951年）、『パワー・エリート』（1956年）の当時の米国社会を分析した三部作（trilogy）である。

この三部作を通して、ミルズは一貫したテーマを追い求めた。分析対象は、米国社会とその変容である。米国社会の構成原理において、第二次大戦中の軍事体制が戦後体制にどのように継承されたのか。彼が思い描いたリベラルな民主的社会であるはずの現実の米国社会はどのように変容し、変容しつつあるのか。この論点は、彼の関心の多くを占めた。戦中の軍産複合体制はさらにそこに官が

加わり、軍産官体制が戦後の冷戦体制という世界秩序の下で一層大規模官僚化し、米国の民主主義社会を大きく変容させるのではないかとミルズはみた。こうした状況を変える主体を、ミルズは最初に労働組合の指導層—新しい権力者—に求めたが、大企業と同様に大組織という官僚機構—官僚主義—に飲み込まれ、その限界を見た。つぎに、勃興するホワイト・カラー層—中流階級—もまた大組織の官僚機構に取り込まれることになり、ミルズは官僚組織の頂点に立つパワー・エリート層に改革の旗手を追い求めるが、ここにも限界を見た。この前後の時期から、彼の著作に目立つのは知識人論である。そこには知識人（intellectuals or intelligentsia）への期待があり、大学に籍を置く研究者たる大学教授の影響力の可能性についても論考を残している。

ミルズが大学教授などいわゆる学識者（intellectuals）に期待したのは、その研究論文や公の発言の影響もさることながら、学識者予備軍としての大学生を通じての社会認識の深化と社会変革への行動にあつたのではないだろうか。だが、大学生そのものがいまではミルズの時代と比べものにならないほどに、大衆化（mass public）することによって、ミルズのエリート・大衆論の論拠となる社会構造そのものが大きく変化してきた。大学生の大衆化以上に、大学教授—知識人—そのものが大衆化した現在、知的階級としての大学教授や大学そのものが大衆化することで、その知的影響力の質が大きく変わってきている。急増した大学の急増した大学教授の急増した学術論文や評論などは、ミルズの時代と比べものにならないほどに毎年大量に生み出され、社会的影響力はその希少価値の喪失とともに、大衆化した学生の間ですらかつてのようには消費されなくなった。大学教育がすでに大きな曲がり角をまわり切ったなかで、マスメディアは、ミルズが予想した以上に、大きく成長し、現在ではSNSの発達が知識

人の役割を大きく希釈させてしまった。社会変革の担い手像もまた多様化することで、社会変革の核となる階層とその境が曖昧化することになった。いずれもミルズが予想もしなかったことであろう。これはいうまでもなく、その後の経済社会構造の大きな変化に起因している。

小論では、ミルズ社会学について、ミルズが大きな影響を受けたソースティン・ヴェブレンの経済学へと遡り、日本社会の現状を分析するうえで、彼我の違いをこえて適応するその現代的可能性を追求・点描する序論(序章)としたい。今後、機会あれば、別途、それぞれの個別の論点を掘り下げて取り上げたい。

ヴェブレンから

ミルズは、1953年にヴェブレンの『有閑階級の理論』について小論を発表している。その中で自身のヴェブレン論を展開している。ミルズは、ヴェブレンの著作を「米国が生んだ最高の米国批判書」、ヴェブレンを「米国が生んだ最高の社会学者」と評して、彼の社会学がヴェブレンの影響を大きく受けたことと同時に、ヴェブレンを乗り越えようとしたことにふれている。ミルズ自身のヴェブレン回帰論とその限界を論じている点で、興味ある論考となっている。

ミルズ研究者のリック・ティルマンは、『C・ライト・ミルズ—生粋の急進派とそのアメリカ人知識人のルーツ—』でミルズとヴェブレンとの関係を「ミルズは、ヴェブレンの重要性を十分に理解し、同時にヴェブレンの思想を斬新な方法で自分の作品に取り入れた数少ない米国の急進派(American radicals)の一人であった。近年、急進的な学問が復活し、さまざまな急進的な社会学者の学会が結成されているにもかかわらず、……彼らは米国の急進的な遺産の存在をほとんど無視している。……ヴェブ

レンと彼の仕事への関心はほとんどない。したがって、したがって、ヴェブレンがミルズに与えた影響や、両者の仕事における重要な構造的類似性について、急進的な認識(radical recognition)がほとんどないことは、驚くべきではない。しかし、ミルズとヴェブレンのあいだには、独立した知性と政治家たちは、社会科学の権威に対する共通の批判、米国の主流文化からの疎外など、大きな類似点が存在する。また、その歴史的なマクロ社会学的な視点を重視する点でもミルズとヴェブレンは共通している¹⁾と指摘する。

ヴェブレンと同様に、「数少ない米国の急進派(American radicals)の一人」と位置付けられたミルズは、ヴェブレンが「流行遅れ」で「異端児」であったにもかかわらず、米国で読み継がれてきた理由について、「彼の批判がもっともらしい」からだけでなく、「彼の(批判の)スタイル」にあり、「社会学者というよりも歴史家」であった点に求めている²⁾。一方、ミルズの著作、とりわけ、『社会学的想像力』(1959年)が現在まで読み継がれてきた大きな理由の一つは、彼の「批判スタイル」にあることは偶然以上にヴェブレンからの影響があるように思える。たしかに、ティルマンのいうように、ミルズもヴェブレンも「歴史的なマクロ社会学的な視点」を重視した研究者であった。他方で、ヴェブレンの文章は、『企業の理論(企業論)』(1904年)が典型であるが、独自の用語と修辭法で、その文章はお世辞にもわかりやすいとはいえず、一般大衆に向けて書かれたとはいえない。ヴェブレンの著作は、当時としてはよく読まれた『有閑階級の理論』を除いて、彼の他の著作が読み継がれなかったのはこの点に起因するであろう。他方、コロンビア大学などで大学院教育—研究者養成—にかかわる機会を与えられなかったために、一般大衆読者も意識するようになったミルズは、先達としてのヴェブレンの軌跡についてつぎのように指摘する。

「米国では、ヴェブレンの時代から二つの社会学的研究が盛んであった。一方は『方法論』を、もう一方は『理論論』をうたい文句とする。どちらも、本来の学問を見失うことになる。

高次統計学者たちは、真実と虚偽の区別がつかないほど細かい粒子に分解し、その方法のコスト的厳密さによって、人間と社会を、そしてその過程で彼ら自身の心をも矮小化することに成功している。一方、大理論家たちは、人間の行動や社会を明確に記述し、説明し、理解するための努力から手を引こうとする部分的に組織化された試みを代表する。……ソースティン・ヴェブレンの著作は、こうした高次の無知が支配する傾向に生きた抗議として際立っている。彼は常に些細なことと重要なことの区別が付き、学問的な異である多忙や虚飾を警戒していた。……専門家が自分たちの都合のいいように世界を構築するのに対して、ヴェブレンは反専門家を公言していたのである。……ヴェブレンの成果は、10冊ほどの本になっている。……アメリカ社会について、一人の個人主義者が書いた本として、これ以上のものはないだろう。」³⁾

最後のヴェブレン評価は賛否があるだろうが、この指摘は、そのまま「反専門家」の意識が強かった社会学者として歩んだミルズの歩みに重なることになる。ラディカルなミルズが理解するラディカルであったヴェブレン評でもある。そのミルズに大きな影響を与えたのは、とりわけ、20世紀の幕開けの直前に発行されたヴェブレンの『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究—』(1899年)である。ミルズ自身は、1953年にヴェブレン論を発表している⁴⁾。ミルズはヴェブレンを、つぎのように辛辣に評する。

「ヴェブレンは、彼の作品が被った運命に感謝しているはずだ。彼は流行遅れの頭脳でありながら、思考様式を確立したので。

異端児であったが、その視点はアメリカの社会思想の規範として受け入れられている。実際、彼の視点は、ヴェブレン自身が確立した規範以外に批評の基準はないと言いたくなるほど、完全に受け入れられている。このことは、賞賛と同時に非難を楽しむ社会の中で、批判者であり続けることが難しいことを証明しているように思う。ヴェブレンの批判が今でも読まれているのは、彼の批判がもっともらしいからだけではなく、批判が真剣に受け入れられないときでも、彼のスタイルがそうさせるからである。そのスタイルがアメリカの社会科学の必ずしも優れているところではない。実際、一部の歴史家がスタイルを重視しているにもかかわらず、ほとんどの社会学者はスタイルを避けている。そして、この点でヴェブレンは『社会学者』というよりも『歴史家』なのである。⁵⁾

このヴェブレンのスタイル評もまた、ミルズ社会学のスタイルとしての歩みとも重なる。ヴェブレンは彼が生きた時代を「クラックポット・リアリズム (crackpot realism)」⁶⁾ や分析概念としての「用語」にこだわった。ミルズもまた同様に社会における「クラックポット (虚偽)」の現状を掘り起こし、彼自身の分析用語—スタイル—にこだわったのである。この二人はある種の似た者同士であるといってもよいかもしれない。ミルズはヴェブレンの見方の傾向を二分法 (dichotomy) 的にとらえ、「ヴェブレンの見たアメリカは、二つに分かれているように見えた。ヴェブレンの著作のすべてに共通するのは、生産的で有用な活動や気分と、派手で名誉なもの、事務的なものに対する労働的なもの、金銭的で略奪的なものに対する産業的で愛すべきものとの区別であった」⁷⁾ としたうえで、私的所有権の成立を前提として、有閑階級の出現は「金銭的な競争となり、財産を持つことは名誉をもつことであり、不在の所有者側に、個人的に使える以上の財産を持

つ者と生活するのに十分な財産を持たない者との、不利な区別とより優れた感情を打ち立てることになった」⁸⁾とヴェブレン論を展開した。

ミルズにとって、そのようなヴェブレン的な世界（社会）観、とりわけ、「有閑階級の理論」について、「一国の歴史のある時期における上流階級の要素についての理論である。19世紀後半のアメリカ……『成金』に対する批判」⁹⁾であり、彼の激しい「怒り」ではなかったのかと手厳しく批判する。ミルズはこの見方の根底に、ヴェブレン自身の仮定＝「金銭的規模の上位における富の蓄積は、規模の下位における窮乏を意味する」前提があり、「ヴェブレンの思想の中に、階級経済的な欠乏の観念が生き残っているようなものであり、技術的な豊かさに対する自信のなさを表しているのだが、ヴェブレンの残した単純な言葉では、今では受け入れることができない。ヴェブレンは、当時の移民集団と所得の富のきわめて不公平な分配を考えて、経済のパイを拡大する可能性を十分に考慮していなかった。特に、第二次世界大戦以降におこったことは、アメリカの人口の大半が際立って消費できるようになったことを意味していた」¹⁰⁾と指摘する。

これは大量生産・大量消費（大衆消費）時代の成立前に生きたヴェブレンと、大量生産・大量消費（大衆消費）の成立の以降期に生きたミルズとの時代感覚の相違でもあった。この点は、ミルズ以後の社会学者のミルズ評にも妥当する。ミルズの想像以上に、米国社会は大きく変容するのである。さて、ミルズの指摘のように、アメリカ社会では「派手な消費は上流階級に限ったこと」でなくなっていたし、のちにミルズが研究対象とした中流階級（中間層）の生活スタイルにも、かつての有閑階級（上流階級）の消費スタイルが擬制化されており、こうしてアメリカ経済の拡大サイクルが成立していたのである。また、「労働は恥ずべきものであるという

ヴェブレンの考え方」も、アメリカ人—とりわけ、ビジネスマン—の「ピューリタンの労働倫理」とは相いれなかったのではないかとみる。

ミルズがこうした点にこだわったのは、ヴェブレンと同様に、若いころから個人の心理的な側面やその拡大された社会心理的な側面に着目したものの、ヴェブレンがその心理的側面のもつ「社会的機能」については比較的無関心であったことへの反発があったからであろう。この点に関して、ミルズはつぎのように指摘する。

「ヴェブレンは心理的な充足感に関心があり、その社会的機能を無視する傾向があった。彼は『機能』という言葉がこのように使われることを好まなかっただろう。彼の価値観からすると、『機能』という言葉は、まさに職人的な人間や軍隊のためにとっておかれたものだからだ。身近な例として3つだけ考えてみればよい。

ヴェブレンが楽しんだ社交界の多くは、実際には、様々な営利—との意思決定の場であり、様々な階層や地域間の威信ある行動の仲介の場であった。それゆえに、威信は単に個人のエゴを満足させる社会的ナンセンスではなく、統一的な機能を果たす。レジャー活動は、上流階級の様々な部門や要素の間で意思決定の調整を図るための1つの方法である。このような階層的な活動はまた、上流階級を調整し、結婚市場を提供する。……息子や娘を独占することによって、血統の合法性に階級を固定し、富裕階級を無傷で散らからないように役立つ。

そして、『スノッブ』的な排他性は、もちろん、余裕のある人たちのプライバシーを確保する。他者を排除することで、高位高官たちは一連の私的世界を構築し、維持することができる。……このように非人間的な意思決定と非公式な感性を融合させ、エリートの人性格構造を形成しているの

である」¹¹⁾。

ヴェブレンの『有閑階級の理論』との関連にふれておけば、ミルズはこの上流階級（＝有閑階級）の見方の多くをヴェブレンに負っているが、その社会構造に果たす機能にこだわることで彼の「パワー・エリート」論を展開させることになる。ミルズ自身は、ヴェブレンの限界として、「私が思うに、ヴェブレンは名声について十分に真剣に考えなかった。彼は『被保護階級』や『下層民』は見ていたが、『パワー・エリート』は見ていなかったのだ」¹²⁾と指摘するのもそのためである。ただし、ミルズのこの見方は、19世紀後半の米国社会のなかで思索したヴェブレンの時代感覚と、その後の展開を知る次世代のミルズの時代感覚の相違でもあった。同時に、ミルズは歴史観の相違にも有閑階級のとらえ方の相違を見出す。ミルズはいう。

「ヴェブレンは、その歴史理論のために、地位と権力の関連に適切な注意をはらわなかったのだろう。彼の言う『有閑階級』の人たちは、歴史を作る人でもないし、実際、歴史の中で本当の意味での機能を果たしていない。近代社会では、工業力が歴史の原動力であり、余暇階級は生き残り時代遅れ、時代錯誤、寄生的な成長であるとヴェブレンは考える。実際、ヴェブレンは『彼らは完全な意味で産業社会の有機的な一部でない』と明確に考えていた。『そのような現実的なコミュニティでは、革新者が重要であり、有閑階級においては、革新者は下品であり、革新は控えめに言っても悪い形式である』。

技術革新者は歴史を作る人であり、その次に、ヴェブレンによれば、新しい技術的条件に対応するために自分のやり方を変えざるを得ないひとたちである。今日、私たちは、技術とその発展や利用を適応させ導く制度や人間との関係について、このような単純すぎる見方をできない。これは、ヴェブレンに見られるいくつかのマルクス

主義的な含意の一つであり、共同体にとって機能的に不可欠な者こそ重要であり、寄生する者は破滅的であるという仮定である。もちろん、現代では、技術的に寄生虫のような人間が権力を獲得し、権威をもってそれを保持するのをあまりにも多く見てきたので、このような国民的で楽観的な歴史理論を信じることはできない。¹³⁾

要するに、ヴェブレンの「有閑階級」は、決して安定した階級ではなく、その後、アメリカ経済の一層の工業化—ヴェブレンの用語では「機械化」—によって、「永続的安定した」ところの「威信」や「権力」を保持できる基盤が大きく変容していくことになる。かつての「上流」階級であった有閑階級に代わって、国家的な威信制度の頂点にたつことになったのは、ミルズの時代においては、経済的（大企業）エリート、政治的エリートと軍事的エリートの複合体となってきたというのがミルズのヴェブレン批判の中心にあった。ミルズは、「この30年間で、富裕層と政治・軍事エリートがうまく再編され、経済・政治・軍事エリートが合併して新しい企業的なような階級になる兆しを見えてきたのである」¹⁴⁾と指摘するのもそのためである。

ここで、ヴェブレンの『有閑階級の理論』¹⁵⁾へ立ち戻って、彼の立論を振り返っておこう。同書は、結論的にいえば、19世紀末期のアメリカ社会の構造を、生産的職業である「勤労者階級」—ヴェブレンの用語では「ものづくり（製作者）階級」—と、非生産的な階級である「有閑階級」という二つの階級の間を心理学、哲学思想、社会学、文化人類学、歴史学、経済学など学際的視点からとらえ、その思考の特徴や生活様式を明らかにしようとした著作であったといえる。編集者などから難解な文章のために、何度か書き直しを指示された同書であるが、おおよその内容は、つきに示す構成目次からわかりやすい¹⁶⁾。第1章「序説」、第2章「金銭的な競争心」、第3章「顕示的閑暇」、第4章

「顕示的消費」、第5章「生活様式の金銭的な標準」、第6章「好みの金銭的な基準」、第7章「金銭的な文化の表現としての衣装」、第8章「産業からの免除と保守主義」、第9章「古代的特質の保存」、第10章「現代における武勇の存続」、第11章「幸運を信じる心」、第12章「信心深い儀式」、第13章「競争心にもとづかない関心の存続」、第14章「金銭的な文化の表現としての高等教育」となっている。こうした章のなかには、以前に個別論文として発表した、たとえば、「衣装論」がそうであるし、「高等教育論」については、のちに1918年に発表した『米国における高等教育—実業家による大学運営に関する覚書—』がある。後者については、ミルズは1941年にウィスコンシン大学に博士学位請求論文「社会学とプラグマティズム—米国における高等教育—」（1964年に出版）を提出して、学位をえているが、これはヴェブレンの高等教育論を意識している。いずれにせよ、「有閑階級論」で展開した諸概念や問題意識はヴェブレンの生涯にわたって保持されたといえるだろう。

ヴェブレンは、第1章「序説」で「有閑（レジャー）階級という制度（インスティテューション）がその最高の発展を遂げているのは、たとえば封建時代のヨーロッパや封建時代の日本のように、野蛮時代の文化が高度化した段階においてのことである」¹⁶⁾と前置きしたうえで、「この階級的区分のなかで最も重要な経済的な価値をもつものは、それぞれの階級に固有な職業の間で保たれる区別である。上流階級は、慣習によって産業的な職業から免除されたり排除されたりしており、ある程度の名誉をとまう一定の職業が約束されている」¹⁷⁾なかで、経済発展は消費することがあたかも職業のような階級＝有閑階級の成立を促す。そうしたなかで、人間とはどのような主体（agent）なのであろうか、と問う。

ヴェブレンは「人間はあらゆる行動規範の

なかに、なんらかの具体的で客観的な、さらには、一般的な目的の達成を望むような主体である。……人間は有用性や効率性を高く評価し、不毛性、浪費すなわち無能さを低く評価する、という感覚をもっている。この習性あるいは性向は製作者（ワークマンシップ）本能と呼ぶことができよう。……製作者本能は、結局は、人と人との間の競争的な、あるいは妬みを起こさせるような比較をもたらすことになる。……結果的に、製作者本能は競争心（emulation）にもとづく力の誇示をもたらすことになる」¹⁸⁾と指摘する。

ヴェブレンの歴史観では、本来は製作者本能—ちなみに、この「製作者本能（ワークマンシップ）」は、1904年に発表されることになる『企業の理論』でも鍵用語となっている—にもとづいた「競争心」は、資本主義経済の発展とともに「私的所有権」とともに、金銭的な競争心へと変容し、「蓄積された富をさらに賞賛に値する仕方ではひきらかす努力、あるいは、結果的にひきらかすことになる努力を意味するようになる」¹⁹⁾のであって、富の象徴としての見せびらかすような消費を行える「有閑階級」の成立を促した。この階級は消費することが仕事なのである。ヴェブレンは「閑暇（レジャー）」は「怠惰」ではなく、「時間の非生産的な消費」を意味するのであって、生産的な仕事に従事するのではなく、「何もしない生活を可能にする金銭的能力の証拠」であるとみなした²⁰⁾。具体的には「ありふれた種類の産業的職業を次第に免除されてゆく過程、それはふつう妻、すなわち正妻における免除をもって始まる」²¹⁾人たちである。

この階級は、とりわけ、欧州的な封建制—貴族制度—の歴史をもたない米国社会—あつては、目立つような消費—ヴェブレンの用語では「派手な消費（conspicuous consumption）」が大きな意味を持つことになる。たとえば、衣装、食事、建築、美術・工芸、社

交から教育までが分析対象にされる。かつての製作者本能としての競争心が、消費においても継承されることになる。有閑階級は派手な消費を競い合うことになった。ヴェブレンはいう。「産業の発展が高水準に達した現代的な共同社会では、有閑階級が蓄積した富の量がとてつもなく大きくなっているため、その階級に属する女性は、平俗な生産的労働に従事するという汚名をまったく着せられなくなる。ここでは、代行的消費者としての女性の地位は、大多数の人々の感情のなかでその固有の役割を維持できなくなる」²¹⁾。ヴェブレンは、欧州社会のように封建時代からの名士なき米国社会においては、こうした有閑階級の金銭的な文化は、従来の上流階級のなかにあって生産的労働を「嫌悪」する伝統が滑り込むことによって、保守主義や復興主義の伝統が継承されることを見出し、そこから旧来制度の改革への強い意志が生まれていないことを主張している。

旧来制度や現行制度擁護の保守主義は、この階級が「変化した産業技術の要求に合わせるために、財産没収などという罰則によって、彼らの生活習慣と外部世界に対する理論的認識を変更するよう求められるわけではない。……社会進化における有閑階級の任務は、進展するものを妨げ、時代遅れのものを存続させることである。……富裕な人々とそうでない人々の間にある違いは、保守主義を助長するような動機の差というよりもむしろ、変化を強要する経済的な力に晒されている程度の差なのである。富裕な階級の構成員が、他の階級の人々ほど容易に革新遂行の要求に屈しないのは、彼らがそうするように拘束されていないからなのだ」²²⁾というのがヴェブレンの見立てである。ちなみに、この指摘は、現在の米国社会でのイノベーションの担い手の社会層—ベンチャー起業層—を分析するうえでも参考になる見方ではないだろうか。

また、金銭的な文化としての有閑階級の文

化は、それ以前の製作者本能ともいうべき「競争心」に関連したものの、ヴェブレンは「その最近の発展においては、効率性、さらには金銭的な地位に関連した妬みを起こさせるような比較の習慣を排除してしまうことによって、それ自身の基礎を反故にし始めている。他方、有閑階級の構成員であれば、男も女もともに、生活の糧を入手するために仲間と競争的に闘う必要性からかなり解放されているという事実は、競争的な闘いで成功するのに役立つような習性に恵まれていない場合でも、この階級の構成員がたんに生き残るばかりか、一定の範囲内で気の向くままにやっていく、ということさえ可能にしている」²³⁾とその米国社会への定着を示唆する。つまり、元来の製作者本能に内包されていた競争心が、競争心にもとづかないものとして、有閑階級の礼儀作法や処世訓が他の階級にも伝搬することが示唆されている。なお、ヴェブレンが頻繁に使用する「ワークマンシップ」は、翻訳書や彼を取り上げた論文などでは「製作者本能」と訳されることが多いが、彼の使用する文脈からすれば、製作者＝小生産者の労働精神であり、ものづくり本能に置き換えてもよい概念でもある。

ヴェブレン自身は、こうした有閑階級の文化がどのような社会的影響を及ぼすかについて、『有閑階級の理論』で展開しようとしたのである。同書の副題にある「制度の進化に関する経済学的研究」の「制度」とはまさに、人の行為・行動の背後にある「思考習慣」のことである。ヴェブレンはそうした制度を米国の産業社会の展開の下での経済的側面から分析を試みたのである。ヴェブレンの観察対象であった当時—19世紀から20世紀にかけて—の有閑階級の消費スタイルについては、その後、米国は大衆消費社会を迎えるなかで、どのように変化していったのだろうか。ヴェブレン自身はそれまでの小生産者や小さな商店の店主に勤勉な労働倫理—ワークマンシップ—に強い共鳴感を持ち、そこにあ

る種のノスタルジーを感じながらも、そうした労働倫理の下で働く必要のない資産層—有閑階級—の消費スタイルがやがて大衆化することを見通していた。消費することを美德とする思考習慣の大衆化である。これはヴェブレンも影響をうけたマルクスの生産力中心の資本主義観に修正を迫るものであったに違いない。生産力を著しく引き上げた機械化(machine process)による大量生産体制は、大量消費体制によって維持されなければならない。上流階級の消費スタイルはある種の模倣というかたち—廉価商品化や類似商品化—で、大衆化することで経済の拡大が行われることになる。なにも、これは物的消費だけではなく、サービス消費においても妥当するのである。教育などもその事例であり、『有閑階級の理論』の最終章が「金銭的な文化の表現としての高等教育」となっているのは象徴的である。この「金銭的(pecuniary)」は、「製作者本能(workmanship—ものづくり本能)」と並んで、ヴェブレンの基本的な分析概念であり、他の著作でも使われる頻度の高いものである。

ヴェブレンは、「有閑階級の理想の影響が最も明白に現れるのは、固有の意味の学問、とりわけ高等教育においてである」²⁴⁾と指摘する。ヴェブレンの高等教育論—大学論—は、有閑階級の学ぶ場としての大学では、非実用的な古典やいわゆる教養教育が一般的であり、実学はもっぱら大学外場で発展してきたのである。有閑階級の金銭的文化は、単に商品だけではなく、サービスとしての教育の場である大学にもその影響を及ぼし、有閑階級と他の階級を区別するようにも機能することを、ヴェブレンは示唆する。これは実学の背景にある「製作者本能」とは対照を為す。ヴェブレンはつぎのように指摘する。

「教育は、ある意味では聖職に従事する代行的な有閑階級の副産物であることをもって始まったことになり、それ故に高等教育は結果的に、すくなくともごく最近まで、

ある意味で聖職者階級の副産物ないし副業であり……秘教的な知識と開放的な知識との間の区別がほどなく現れてくる。……直接的にはなんら経済的ないし産業的な効果をもたない知識から成り立ち、後者は、物質的な効果をもたない知識から成り立ち、後者は、物質的な生活目的のために習慣的に利用される産業過程や自然現象に関する知識から主として成り立っている。早晩この区分線が、少なくとも大衆の理解においては、高等な教育と低俗な教育との間の通常の境界線になっていった。」²⁵⁾

ヴェブレンはかつての聖職者の権威のシンボルであった衣装や儀礼などの儀式も、大学での学帽、ガウン、入学式や卒業式などとともに、「学位、位階およびある種の学者的な使徒伝承を示唆するような仕方ではなされる特権……」²⁶⁾に擬制化されていき、「地域社会のなかで目にみえて富が蓄積され始めるやいなや、それゆえまた、寄贈された学校が有閑階級の後援者を頼りにしはじめるやいなや、学者風の典礼と清掃、上流階級風で学者風の厳粛さの点で古来の形式に従う、という要請が明らかに増加してくる。……学帽とガウンは、最近のここ数年かに、この地域の多くのカレッジで学識をみにつけた勲章として採用されてきた。したがって、ずっと早い時期には—すなわち、教育の正当な目的に関して、古代的な見解に先祖返りしようとする強固な運動を支持するために十分な量の有閑階級が育ってくるまで—このようなことはまず生じえなかった、と言って何の問題も残らない」²⁷⁾と指摘する。だが、他方で産業化とともに、かつての聖職者に代わり、名声と権威をもつのは大学教育を受けた「産業の将師」となり、大学教育のあり方もヴェブレンの時代には変化が生じてきた。ヴェブレンは「効率性(究極的には生産の効率性)に貢献するような知識分野が新たに承認され、消費を高度化したり産業効率を低下させたりする

のに貢献する学問分野、身分体制に適合的なタイプの性格にとって便利な学問分野を押しつけた²⁸⁾傾向が明らかになる一方で、「学問のなかでたんなる名誉しかもたないものにもまして、たんなる有用性しかもたないものへの嫌悪感をいっそう鼓舞することによって、……役に立つことがない知識の取得に学習者の時間と努力を費やさせること」²⁹⁾で有閑階級の文化性が継承された側面も無視できないとみた。つまり、職業選択を意識した実学ではない学問を学ぶ場である大学一大半は私学—で学ぶことは有閑階級だけに許された贅沢なものである、とヴェブレンは示唆する。

いずれにせよ、ヴェブレンの後期の著作を振り返っても、その基本的な分析概念のかなりの部分は、『有閑階級の理論』で取り上げられている。また、ヴェブレンの高等教育論は、その後、既述のように1918年の『米国高等教育論』でさらに拡張され、米国社会における金銭的文化の一層の進展と企業層の拡大によって、大学もまた世俗化と企業化によって大きく変わることを予想した。企業活動の拡大による社会変化については、『有閑階級の理論』のあとに出版された『企業の理論』や、1914年の『製作本能論 (workmanship)』で取り上げられることとなる。こうしてみると、ヴェブレンにとって、『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究—』は、その後の研究においても出発点になったことが理解できよう。副題にある「経済学的研究」については、『有閑階級の理論』では十分に展開したとはいえない。それゆえに、個別の経済論としてその後、『企業の理論』などの著作に取り組んだように思える。加えて、有閑階級がアメリカ経済の成長によって変容を迫られつつあったことへのヴェブレンの再度の取り組みがその後の著作に引き継がれた。米国社会の変容の背景には、大企業体制の成立があった。大企業など企業活動が分析対象となった。ヴェブレンは

『企業の理論』でも、「有閑階級理論」を「大企業体制」の成立から分析を進めている。立論では、ヴェブレン的方法論としての「二元論」から「機械制産業」と「企業」との結合が重視されたのである。ちなみに、のちに、ミルズは、私的所有権にもとづく富の集積としての資産に支えられた働かない有閑階級は、企業経営者などの働く有閑階級へと変化することを、ヴェブレンは見落としたのではないかとみただのである。

ここで、『企業の理論』を概観しておこう³⁰⁾。同書の狙いは、第1章「序論」の冒頭の数行に端的に示されている。すなわち、「近代文明の物質的な枠組みは産業体制にある。この枠組みを活かす指導力は企業 (business enterprise) である。文化の他の既知の局面以上に、現代のキリスト教は経済組織からその気質をとっている。この近代的組織は資本主義体制、すなわち、いわゆる近代産業体制である。その特徴と同時に近代文明を支配する諸力とは、機械化 (machine process) と利益を求める投資である」³¹⁾。「機械化」とその担い手の「企業」については、それが「最重要である産業体制の諸部門で……支配的な地位を占める。この意味で、現代は機械化の時代なのである。産業界の機械化の優位性は、その種のすべての現行産業の状況に及ぶ。同様に、現在は企業の時代である。全産業活動は、利潤を求める投資原則だけで実行されてはいない。しかし、産業のもつ諸力の大多数は、そのような投資則で組織されている。……企業者 (business man)、とりわけ、広範かつ思慮分別をもつ企業者が産業界で支配力を持つようになった」³²⁾のである。こうして、ヴェブレンは、20世紀は「企業」の時代の幕開けであると宣言したのである。ヴェブレンの慧眼である。いまや、企業化は時間と場所をこえてあらゆる分野へと広がったのである。ヴェブレンは述べる。

「大企業 (large business man) は社会 (community) が成り立っている生活の切

迫した必要物を支配する。それゆえに、企業者とその財産は文明国の不変の関心の中心をなしている。現在のみならず、近未来での文明生活の過程に対する理論的探求にとって、企業者とその事業に匹敵する文化状況での単一要因は一つもない。

むろん、それは近代社会 (modern community) の経済生活の研究にも特にあてはまる。理論家が特に近代の経済現象を説明する際に、その接近方法は企業家の立場から考慮しなければならない。それは、これらの現象の進路を結締するのは、企業者の立場からであるからだ。近代の経済状況に関する理論は、まずは、企業の動機・目的・方法および効果など企業活動の理論でなければならない。」³³⁾

この機械化—機械制生産—は、単に製造現場だけでなく、消費の場における商品やサービスの「標準化」をもたらし、人びとの消費行動にも影響を与える。ヴェブレンは「生活の外部からもたらされた機械的規則性の結果として、個人の生活は、広範囲にわたって、産業過程に非常に大きな影響を与えるなんらかの出来事によって、ほぼ同様に影響をうけることになる」³⁴⁾と指摘する。この機械化を担う企業の動機は営利事業の追求であり、そうした活動が社会全体の経済的福祉を左右し、その決定権をもつ企業者の動機である金銭的目的—企業原則—は、産業全体の利害と必ずしも一定するものではないと、ヴェブレンはみなした。ここで社会事象のヴェブレンの二元的視点は、「企業」と「産業」の不均衡論を展開させている。利潤原則の拡大は、貸付信用の拡大をもたらす。ヴェブレンは「企業者の目的は自身の事業から最大の総収益を得ることにある。企業者は、その収益が引き出される過程をできるだけ短縮化することが、おそらく関心事である。還元すれば、その資本の回転をできるだけ短くすることなのだ」³⁵⁾と指摘する。ヴェブレンは資本の回転率を加速化させる方途として、大規模な広

告宣伝の採用、事業拡大のための借り入れ—信用—や社債などについても言及する。

ヴェブレンは米国の産業社会が利潤拡大を求めて積極的に投資を行う企業者とは、とりわけ、合併と吸収を繰り返して経営規模の拡大を拡大させ、産業への支配力を一層高めつつある大企業であることを指摘するとともに、大企業の営利活動が米国社会に大きな影響を及ぼすことを示唆する。ヴェブレンが鍵概念として提示する「製作者本能」はかつての手工業時代のノスタルジックな姿であり、手工業者は自らの工場=産業設備の生業的な所有者であり、生産上の効率などに関心があったが、現在の企業者は利潤動機—価格体制—によって大きく突き動かされ景気循環を繰り返し、それが社会の構成原理—法と政治を含む—となっていることを繰り返し強調する。資本の概念も従来の物的資本だけでなく、取引関係、営業権、特許、商標、ブランド、技術など—いわゆる「のれん」—へと拡大してきたことも同時に指摘される。

こうした体制の今後について、ヴェブレンの見解は気になるところである。ヴェブレンは最終章で「企業の必然的衰退 (natural decay)」論を展開している。ヴェブレンはつぎのように分析する。

「企業の成長は、機械技術という物質的な基盤の上に成り立っている。機械産業は企業にとって不可欠であり、機械的過程なしには成立しない。しかし、機械過程の規律は、企業の精神的、制度的基盤を切り崩す、機械産業は、企業の継続的な成長とは相容れないものであり、長い目で見れば、機械過程の文化的効果との闘いにおいて、企業原理は長期的に勝てない。なぜなら、機械体制の毀損や抑制は、企業を徐々に壁際へと押しやるからである。一方で、機械体制が自由に成長すれば、現在の企業原理は頓挫してしまうであろう。

企業活動の制度的基盤—自然権の体系—は、特異な不安定性をもっているように思

われる。状況が変わってもそれを保持する術はなく、状況が変わった後にそれを戻す術もなり。企業活動の制度的基盤は、個人の自由と平等、そして慣例的な権利の混在する混合的な成長なのである。自然権体系の下での制度や法律の諸点は、本質的に暫定的な性質をもつように思われる。³⁶⁾

とはいえ、「企業の完全な支配は、必然的に一過性の支配であると言えるようだ³⁷⁾」としつつも、他方で企業を中心とする営利原則が広範かつ強力に社会に影響を及ぼしてきたのである。ヴェブレンは「高等教育論」でも、企業の営利原則が大学経営にもますます浸透していることを指摘する。1918年に発表された『米国における高等教育』の副題は「実業界による大学の運営に関する覚書³⁷⁾」となっている。ヴェブレンは、営利事業の遂行において当然のこととして受け入れられてきた組織、管理に関する基準が学問分野でも不可欠とされるようになることで、知識の追求機関としての大学—欧州と異なり、元々、実学志向であった米国の高等教育機関—にも浸透すると見通した。その運営面においても、学問的な素養がなくとも、ビジネス面で富裕層が高く評価されるようになることで、理事会などで企業者が大きな役割を果たす。ヴェブレンは、当時の状況として、そのような営利原則が大学に入り込んできたばかりで、その浸透はまだ先のこととみていたが、現在では、米国の多くの大学ではヴェブレンの予想した通りとなったのではあるまいか。ヴェブレンは、営利原則や競争原理が学問において浸透しすぎることに危惧を示すと同時に、人類の文化遺産の保管の場としての大学の機能が大きく変容することにも危機感をもっていた。先にみたヴェブレンの「企業衰退論」の根拠は、『有閑階級の理論』以来の人々のものをつくるという自然な「製作者（ワークマンシップ）本能」が、企業の営利原則—金銭的文化—によって抑圧され、歪められることで、うまく機能しなくなることを

予想したように思える。これは現在盛んに展開しているイノベーション論を考えるうえで、私たちに企業活動の再検討を促す論点でもある。

経済学者としてのヴェブレンは、たしかに米国社会の変容を、それまでの研究者たちが注目しなかった「制度」—単に法律などではなく、人びとの思考習慣や消費における行動原理などを含め—の進化に着目して、社会動態のより根源的な要因を追い求めようとした点においてラディカルであった。他方、ミルズは経済学ではなく、社会学を追い求めるようになる。それは、ミルズの残した多くの論稿において、マックス・ウェーバーやカール・マルクスなどと並んで、あるいは、それ以上にヴェブレンに言及することが多かったことにもよく表れている。これはミルズ社会学の特徴でもあり、ヴェブレンを乗り越えようとした意思でもあった。

ミルズ社会学論

ミルズの著作は、「社会学的」方法論としての古典として現在でも読み継がれている『社会学的想像力』（1959年）を除いて、現在では、他の著作はさほど読まれなくなった社会学者である—最近、再版されるようになってはいるが—。

ミルズ研究者のキース・カーは、『ポストモダンカーボーイ—C・ライト・ミルズと新21世紀社会学—』で、現在ほどミルズ社会学を必要する時期はないとつぎのように、「ラディカル」な社会学者としてミルズ再評価論を展開する。

「おそらく、私たちの学問の短い歴史の中で、今日ほど社会学がC・ライト・ミルズのような急進派を必要としている時はないでしょう。彼の考え方は、すべてのラディカルな考えと同様に重要である。というのは、これらの考えに同意するかは別として、少なくとも、社会的現実に対する私た

ちの合理的な認識を支配し、これらの環境に対する私たちの非合理的、意志的、感情的な反応をますます支配する畏から抜け出す別の方法を示しているからである。』³⁸⁾

ここでいう「畏」—非合理的、意志的、感情的な反応—と人びとの慣習的思考や歴史的を解釈されてきたような文化など、まさにそれはヴェブレンが『有閑階級の理論』や『企業の理論』などで多くの例示とともに明らかにしようとした「制度」でもある。ミルズに大きな影響を与えたのは、ヴェブレンだけではなくもちろんない。ヴェブレンと並んでジョン・デューイ（1859～1952）などのいわゆるプラグマティズムの影響を受けた。ミルズにとって、「プラグマティズム」とは単に問題の指摘や課題の提示だけではなく、その具体的な解決策とそれを可能にする政治的行動を促すことであり、行動する社会学者としてのミルズをつくりあげていった。カーの「要するに、伝説としてのミルズは、21世紀の始まりに直面する、高まりつつある緊急の問題を解決し始めるための全体論的な方法論を、非社会学者に社会学の世界へと導く手段を提供するのである」³⁹⁾という指摘は、社会学以外の多くの分野において論争を想起させたミルズ社会学のあり方を的確に言い当てている。カーは、そうしたミルズを「ヴェブレンの生まれ変わり（Veblen Reincarnate）」であるとして、「ヴェブレンはミルズに対して多大な影響を与えるようになった。似たような生い立ちから、知的興味、さらには辛辣な文体まで。ミルズは世紀半ばのヴェブレンの生まれ変わりのようである。ミルズはヴェブレンを知ったのは、テキサス農工大学の1年生の時だったと思われるが、テキサス大学でヴェブレンを広く研究し、のちに『有閑階級の理論』（1953年版）の序文を書いている。……数十年後にミルズが公言した文化・教育批判—ヴェブレンの高等教育論（引用者注）—とほぼ同じである」⁴⁰⁾と指摘する。たしかに、ヴェブレンの高等教育論で展開し

たアメリカでの大学の将来展望は、同様のテーマに取り組んだミルズの時代に当てはまるようになる。ミルズの高等教育論はヴェブレンのそれと類似性をもつ。

同様にもう一人のミルズ研究者のトレビノ（A.J.Treviño）もまた、ミルズを知らない世代の大学生向けに執筆した『C・ライト・ミルズ入門』で、ミルズ社会学についてつぎのように紹介する。

「非常に多作で、10冊以上の本と50本以上の論文を様々なテーマで書いている。その印象的な作品群は、多くの言語に翻訳されている。原則的かつ政治的な目的意識を持った公的知識人として、ミルズは20世紀半ばのアメリカの道徳的な不安について、説得力のある文体でベストセラーを書いた。精神面では、ミルズには並外れた知識があり、とりわけ啓蒙主義を学び、心理、理性、自由という啓蒙主義の大切な価値観を力強く擁護していた……ミルズは、半世紀前の進歩時代に活躍したソースティン・ヴェブレン以来、最も影響力のあるアメリカ社会批判者として台頭したのである。まず、ミルズが目指したのは、中央集権的な権力を分散させ、アメリカをより平等な民主主義社会に変えることであり、そのためには、アメリカの組織的な不道徳性と無責任性を糾弾しなければならないと考えた。第二に、ミルズは自らの学問分野を狙い撃ちし、学問的社会学が生気のない自己満足と近視眼的自己陶醉に陥っていることを糾弾した。荒野の孤独な声とは言い難いが、ミルズは当時、こうした取り組みに従事していた社会学者の一人であった。しかし、彼の遺産は、1962年の彼の早すぎる死から10年後に知的成人となった社会理論化の不服従な世代を、アメリカとイギリスに産み落としたのである。」⁴¹⁾

このミルズ評は、簡潔ながら、ミルズの世界社会学者としての歩みをうまく要約している。ミルズ自身は、ヴェブレンが有閑「階級」を

中心にアメリカ社会の分析を進めたように、アメリカの労働階級の指導者層に直目しながらも、ビジネスリーダーだけでなく、優勢になりつつあった給与所得者—ホワイト・カラー層—を広範なインタビュー調査を背景にアメリカ社会の分析を進めている。この点は、書齋の人であったヴェブレンとの対比で、ミルズは行動する人であり、多くのインタビュー調査を積み重ねる研究者であった。

「心理、理性、自由という啓蒙主義」の信奉者であったミルズにとって、「より平等な民主主義社会」の実現にとって、一部のエリート層へますます中央集権化するアメリカの現状と、そうした動きに敏感ではない「学問的」社会学者への痛烈な批判—論争—を繰り返すことで新たな社会学の構築を目指していたように思える。その思い半ばで自らの社会学を体系化する時間を持てなかったミルズにとって、最後のまとまった著作といつてよい『社会学的想像力』はのちの社会学者への遺言のようでもある。ヴェブレンから受け継いだ知的バトンミルズは後世の学者たちに託したようにも思える。眼前の問題に取り組んだミルズにとってより根源的（ラディカル）な問いかけとは、民主的で自由な社会を、ますますそうでなくなりつつ第二次大戦後のアメリカ社会において、どのような階級や階層が改革の担い手となる可能性あるいは潜在性を持つのか。そこをラディカルに問いかけたところに、ヴェブレンを超えようとしたミルズのエリート論や大衆論の根幹がある。

それゆえに、ミルズの「晩年」において、米ソ冷戦の緊張の高まりはキューバ危機に象徴される第三次世界大戦の勃発が空言ではなく、現実味を帯びた時代に、ミルズは軍国主義化した米国資本主義とその権力国家を背景にした現状に、エリート論を展開しながら大衆（the public）論で思想やモラル問題の在処を説こうとした。ミルズのそうした緊張感と使命感を反映させたのが『第三次世界大戦

の原因』（1958年刊）であった。ミルズの次の文章からは当時の緊張感が伝わってくる。

「戦争について考察することは人間の条件に付いて考察することである。なぜなら、第三次世界大戦がどんな仕方で起ころうとしているかをみても、人間の条件はいまやきわめて明瞭に表示されているのだから、この戦争のための準備が、いまや世界の指導者的諸社会の枢要な特徴をなしている。この戦争の予想は、世界現実についての公的定義から生じてくる。これらの定義にのっとって、パワー・エリートは決定し、また、決定しそこねる。公衆と大衆は宿命論的に受け入れる。知識人は洗練し、また正当化する。第三次世界大戦にむかっの源流と突進とは、いまや現代の感受性の一部をなし—そして、われわれの時代を明確に特徴づけている。」⁴²⁾

この指摘は、ミルズのそれまでの『パワー・エリート』論が集約されたかたちとなっている。ミルズは同書で、戦前のニューディール期に企業関係者—大企業—が政界に影響力をもつ地位につき、第二次大戦の遂行のための経済と、戦後の経済体制と軍事体制を方向付けることになったとして、「この経済は、同時に恒久的戦時経済でもあり、また、私企業経済でもある。それと国家とのもっとも重要な関係は、いまでは軍事利益と会社利益との一致に存するのであって、これらの利益は将軍と実業家とによって確定され、政治家と公衆とによって受け入れられるのである。……一見恒久的に見える軍事脅威が、高級軍人の立場を強めている。事実上すべての政治上・経済上の行動が、いまでは軍部が現実についてくださ定義とのかかわりにおいて判断されている」⁴³⁾と指摘する。いまでは、戦争が「紛争」というかたちを含み、こうした体制は一層恒久化したことで、ミルズのようにそれをラディカルな問題として掲げる社会学者は少なくなった。この指摘からしばらくしてキューバ危機（1962年）

が勃発することになる。ミルズはその直前に『聞け、ヤンキー』—日本語版では『キューバの声』—を發表している。ミルズは実際にキューバを訪れ、キューバ革命の指導者であるフィデロ・カストロ（1926～2016）に直接インタビューするなど多くのキューバ人—兵士、知識人、官吏、新聞記者、教授など—の声に耳を傾け、それらをアメリカ人に伝えようとするスタイルをとった⁴⁴⁾。

ミルズは同書の冒頭で（アメリカ人を想定した）読者のための覚書で、アメリカに最も近い隣国であるキューバの問題は単にキューバだけのものではなく、やがて他の南米諸国、アジアやアフリカの諸国にも共通するものとしてあらわれることを暗示して、「空腹民族に属する人びとは、キューバにおいて、ちからいっぱい革命への呼び声に立ち上がりました。彼らの全歴史は、いくつもの極端な仕方、アメリカ合衆国の歴史と結びついていますし、彼らの島は米国の領土にとっても近いのです。……それがいま聞かれなければならないわけは、米国の空腹世界のどのひとつの声にも耳をかたむけることをしないということが許されないほどに兄弟であり、世界ならびに自らに対するその責任が偉大なものであるからなのです。もしわたしたちが彼らに耳をかきないとしたならば、もしわたしたちが彼らの言うことをきかないとしたら、わたしたちは無知からくるあらゆる危険に直面することとなり、それらとともに巨大な諸国民—確実にロシア国民をふくめて—が聞いている……彼らは空腹世界からくるいくつもの声をよく聞いており、そして行動しています。無知からくる失策のいくつかはすでにわたしたち自身の名において、米国政府によってなされてしまいました……」⁴⁵⁾と指摘する。

ヴェブレンの刺激を受けた若きミルズは、社会学理論を学びながら、その20数年後に米国の対外政策や軍産官複合体制などを研究対象とすることを、若いころに、どの程度、

予想していたかはわからない。だが、常に「根源的」な問いをラディカルに求めたことは、ミルズをして、つねに眼前の最重要課題に対峙する行動する社会学者として育てたのは言うまでもない。すでに多くの論稿が發表されてきた彼の三部作—労働組合幹部を扱った『新しい権力者』（1948年）、新たな中流階級であるホワイト・カラー層を対象として「ホワイト・カラー—中流階級の生活探究—」（1951年）、アメリカ政治に多大な影響をもつエリート層を分析した『パワー・エリート』（1956年）—もまた、ミルズのそのような軌跡の結果であれば、納得がいくのではあるまいか。最後にミルズが向かった「より根源的」な取り組みは、それまでの社会学そのものへのラディカルな批判であり、新たな社会学のあり方を求めるものであった。『社会学的想像力』（1959年）はそのようにして生まれた。同書で、ミルズは「社会学的想像力」について、つぎのように示唆している。

「人々が必要としているもの、あるいは必要だと感じているものとは、一方で、世界でいま何が起きているのかを、他方で、彼ら自身のなかで何が起ころうのかを、わかりやすく概観できるように情報を使いこなし、判断力を磨く手助けをしてくれるような思考力である。こうした力こそが、ジャーナリストや研究者、芸術家や公衆、科学者や編集者が切望しているものであり、社会学的想像力とでも呼ぶべきものである。」⁴⁶⁾

ミルズは、ヴェブレンたちにも言及しつつ、「社会学的想像力により歴史と個人史とを、さらには社会の中での両者の関わりを洞察することが可能になる。それが社会学的想像力の責務であり約束なのだ。……それはまた、ソースタイン・ヴェブレン（Thorstein Veblen）の華々しくアイロニカルな洞察……そしてその社会学的想像力こそが、今日の人間と社会の研究においてなにが

最良なのかをめぐる試金石となっている」⁴⁷⁾と指摘する。具体的には、「個人史と歴史、そして社会における両者の交差という問題」⁴⁸⁾に立ち戻り、つぎの3点⁴⁹⁾を絶えず問いかけるべきであるとする。

- ①「社会を全体としてみたとき、その構造はどのようなものか？その本質的な構成部分とは何と何で、それぞれ相互にどう関わり合っているのか？それは他の社会秩序のバリエーションとどのように異なるのか？社会のある側面は、秩序の持続や変化に対して、どういう意味をもっているのか？」。
- ②「この時代というものについて言うならば、それがもっている本質的な特徴とは何で、他の時代とどのように違っていて、その歴史形成に特徴的な道筋とは何であるのか？」。
- ③「この時代のこの社会において、現在どのような種類の人間たちが顕著になってきていて、これから先、それがどうなっていくか？どのような方法で、そうした人間たちは選別され、あるいは形成されているか？・・・この社会のこの時代における行動や性格を観察することで、どのような『人間性』が明らかになるのか？そして、私たちが検討している社会のありとあらゆる特質一つ一つは、『人間性』に対してどのような意味があるのか？」。

ミルズは、自らの実践―「社会の相対性と歴史の変革力を痛切に実感した結果」⁵⁰⁾―にもとづいて、社会学的な方法論はこのような「社会学的想像力」を用いて、「一方で世界において起こっていることを把握し、他方で社会における個人史と歴史とが交差するささやかな地点としての彼ら自身において何が生じているのかを理解する」⁵¹⁾ことであると指摘する。そうした取り組みで「最も実りが多いのは、おそらく『生活圏における私的問題』と『社会構造における公的問題』との区

分」⁵²⁾を理解できることであり、「私たちの時代において、何が公衆にとって重大な公的問題で、何が個人にとって大切な私的問題なのだろうか？公的問題と私的問題を定式化するためには、私たちは、時代の流れを見きわめ、どんな重要価値が脅かされ、あるいは支持されているかを問わなくてはならない。どちらの場合でも、どのような構造的矛盾が顕著なものとしてそこに含まれているかを、私たちは問わなければならない」⁵³⁾のである。

ミルズは、こうした社会学的方法論―社会学的思想力論―を、自ら具体的に研究、たとえば、パワー・エリート論やホワイト・カラー論などに適用したのである。ミルズは自らの実体験を、コロンビア大学の社会学受講生に「自主研究を始める学生のための手引き (Handbook for Students Beginning Independent Work)」というガリ版刷りのパンフレットを1952年に執筆し、配布している。このほぼ同じ趣旨の文章は『社会学的思想力』の付録―「知的職人論 (Intellectual Craftsmanship)」―に収録されている。こうした取り組みに、ミルズがヴェブレンから継承した問題の着眼点や展開方法を、自らの実践論としてラディカルに問いかけてきたミルズの生き生きとした軌跡を、私たちは確認できるのである。

現代的意义とは

ミルズが、その後、「公共社会学 (Public Sociology)」の祖として再評価されてきたものの、それまでミルズ社会学がさほど注目されなくなった理由を探れば、ミルズはつねに現在の社会構造を追い求めたことによるのではあるまいか。ミルズは、眼前の諸問題を研究対象としたことで、著作のなかで、「現在」という言葉をかなり頻繁に使う社会学者であった。これは研究者としてのリスクのある用語の使い方である。なぜなら、「現在」とはつぎの瞬間にすでに「過去」となる。時間

経過によって、分析の真偽が表面的にはすぐに明示的になる。強調するまでもなく、「現在」は、ミルズの時代と比較すれば、経済活動のグローバル化が展開しているし、ミルズの危惧した軍事経済体制はより一層恒常化して、米国経済により一層組み入れられている。ミルズは、軍事体制の民営化がこれほどまで進展することも予想もしなかったであろう。また、当時のミルズ社会学にはジェンダー的視点の欠如、現在のアメリカ米国社会における人種間の緊張関係や経済格差拡大への視点の欠如などを指摘することは、その後の社会変化を知ることのできる現在に生きる私たちにあってきわめて容易なことである。半世紀上の時を超えて、その分析対象とすべき範囲のあり方を指摘すれば、それらはあまりにもないものねだりの問題提起となる。しかし、ミルズの視点はつねにラディカル＝根源的であったことは忘れてはならないだろう。私たちは、それぞれの分野において、ミルズのようにより根源的（ラディカル）なことを対象に据えているだろうか。前述のトレビノは、前掲書（2021年）ミルズ社会学の現代的意義について、つぎのように指摘する。

「根本的な問いとは、ミルズは、今日の社会的勢力を理解するための前向きのガイドとして読むことができるかどうかである。少なくとも、彼の最高の作品は、どのように考え、生きるかという大きな問いを私たちに投げかけるという意味で、その答えは『イエス』である。このように、ミルズの時代から構造的・文化的な変化があったとしても、彼の著作や論文は再読に値する。しかし、彼の社会科学的分析は、戦後のアメリカの大衆社会、パワー・エリート、不況と戦争への漂流についての解釈が中心であり、それほどのもでもない。また、『何ができるか』ではなく『何をしなければならないか』に焦点を当てる傾向のある、彼の綱領的な急進的政治についても同

様である。実際、彼の知的師匠（intellectual mentor）であるソースティン・ヴェブレンのように、『体系』や『学派』を構築することはなかったものの、ミルズが古典的伝統の中で正統な地位を保ち続けるのは、主にその社会的批判が、口語的な用語でいうところの、破天荒な現実主義（crackpot realism）、より高い不道德、明るいロボット（cheerful robot）であったかもしれない。C・ライト・ミルズの社会批評は、より平等で平和で公正な世界の実現を願う新しい世代の社会思想家たちを方向づけ、鼓舞し続けるだろう。』⁵⁴⁾

これはきわめて重要な点である。ヴェブレンが経済学において「制度学派」の祖といわれるが、ミルズは社会学における制度学派といってもよい。ミルズはいう。「近年の心理学と社会科学で最もラディカルな発見は、人間の最も内面的な特徴のいかに多くが、社会的にパターン化されており、教え込まれている」⁵⁵⁾ 制度であり、社会学者もまたそのような制度的枠組みから自由であるはずはない。ミルズがつねにラディカルであったのは、それを自覚しており、つねに「根源的」な問いかけを行ったのである。ミルズは「社会学者が、価値の選択を引き受けず、自分の研究全体に価値が入り込まないようにする方法は存在しない。社会科学の問題は、公的問題や私的問題と同様、期待される価値の危機に関係するのであり、その価値を認識せずにはっきり定式化することはできない。しだいに官僚的・イデオロギー的的目的のために調査が使われ、社会学者が使われる。……自分の研究の使用法と価値を自覚しているかどうか……研究のなかで、社会学者は、価値を選ぶ必要に突然直面するわけではない。彼はとっくに特定の価値に基づいて研究している」⁵⁶⁾ ことに自覚的であった社会学者であった。それこそが「ラディカルとは何か」という問いかけであった。この問いの重要性はヴェブレンからミルズへ、そして私た

ちへと引き継がれてきている。

注

- 1) Rick Tilman ed, *C. Wright Mills: A Native Radical and His American Intellectual Roots*, The Pennsylvania State University Press, (U.S.A), 1984, p.63.
- 2) Ibid., John H. Summers, *The Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 2000, pp.63-77
- 3) C. Wright Mills, John H, Summers ed., op. cit., pp.67-68.
- 4) この小論は、『新アメリカ文庫 (New American Library)』(1953年版)の序文として発表された。
- 5) Summers, op, cit.p.64.
- 6) “crackpot”は「ひびの入った鍋」のことであり、転じて「風変りな(人)」、「変わった(人)」という意味である。
- 7) Summers, op, cit., p.69.
- 8) Ibid.
- 9) Ibid.p.72.
- 10) Ibid.
- 11) Ibid., p.73.
- 12) Ibid., p.74.
- 13) Ibid., pp.74-75.
- 14) Ibid., p.76.
- 15) Thorstein B. Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, 1899. (高哲男訳『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究—』筑摩書房、1998年)。
- 16) 前掲高訳。
- 16) 同上、11頁。
- 17) 同上。
- 18) 同上、26頁。
- 19) 同上、45頁。
- 20) 同上、56頁。
- 21) 同上、67頁。
- 21) 同上、167頁。
- 22) 同上、223頁。
- 23) 同上、366頁。
- 24) 同上、396頁。
- 25) 同上、399頁
- 26) 同上、491頁。
- 27) 同上、404頁。
- 28) 同上、423頁。
- 29) 同上、427～428頁。
- 30) Thorstein Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, 2013 (original edition 1904), 2013, Martino Publishing (U.S.A.), 小原敬士訳『営利企業の理論 (新装版)』勁草書房、2022年。
- 31) Ibid., p.7.
- 32) Ibid.
- 33) Ibid., p.8.
- 34) Ibid., p.34.
- 35) Ibid., pp.49～50.
- 36) Ibid., pp.177～178.
- 37) Ibid., p.189.
- 37) Thorstein Veblen, *The Higher Learning in America: A Memorandum on the Conduct of University by Business Men*, 1992 (original edition, 1918), Routledge, U.S.A.
- 38) Keith Kerr, *Postmodern Cowboy: C. Wright Mills and a New 21st Century Sociology*, 2009, Paradigm Publisher, London.
- 39) Ibid., p.6.
- 40) Ibid., p.60.
- 41) A. Javier Treviño, *The Emerald Guide to C. Wright Mills*, 2021, Emerald Publishing, USA.
- 42) C. Wright Mills, *The Causes of World War Three*, 1958, Simon and Schuster, N.Y., USA. 村上光彦訳『第三次世界体制の原因』みすず書房 (1959年)、1頁。
- 43) 同上、30～31頁。
- 44) C. Wright Mills, *Listen, Yankee: The Revolution of Cuba*, 1960, McGraw-Hills, USA. 鶴見俊輔『キューバの声』みすず書房 (1961年)。
- 45) 鶴見訳、1～2頁。

- 46) C.Wright Mills, *The Sociological Imagination* (Fortieth Anniversary Edition), 2000, Oxford University Press, New York, USA. 伊奈正人・中村義孝訳『社会学的想像力』筑摩書房（2017年）、19頁。
- 47) 伊奈・中村訳同上書、21頁。
- 48) 同上。
- 49) 同上。
- 50) 同上、24頁。
- 51) 同上、23頁。
- 52) 同上、24頁。
- 53) 同上、29頁。
- 54) Treviño, op, cit., p.154.
- 55) 伊奈・中村訳同上書、272頁。
- 56) 同上、298～299頁。